

日本資本主義講座

報 月

2

1953年10月
第2回配本

目次

日本帝國主義の矛盾と自滅……………岡義武：一	日本には帝國主義の自立化の可能性があるか……………宮川實：三
内灘について……………杉浦明平：五	封建的な家族制度とのたがひ……………丸岡秀子：八
共同研究のむすびかき……………島恭彦：二〇	労働運動史研究會……………二

岩波書店

東京都千代田区
神田一ツ橋2ノ3

日本帝國主義の矛盾と自滅

—その國際政治的側面—

岡 義 武

日本帝國主義を決定的破滅へ導いた太平洋戦争への契機を、日本帝國主義發展過程のどの時點に見出すべきか。これは簡単に答え得る問題ではない。日本帝國主義は大陸へのその侵略において、反ソを標榜することによって米英から何がしかの「免罪護符」を獲得しようとしたが、この點はヨーロッパにおけるその「盟邦」ドイツと同様であった。この日本帝國主義を一旦甚だしく當惑させたのは、しかし、一九三九年八月の獨ソ不可侵條約の成立であった。ドイツがヨーロッパ戦争への準備としてこの條約を結んだとき、日本がドイツとの提携關係を今後つづけるためにはその提携はもはや反ソ的方向のものではあり得ず、米英を對象としたものでなければならなかった。それは、ドイツの對ヨーロッパ政策との關係上そうならざるを得なかつたばかりではない。

「北進」を封ぜられた日本帝國主義は、その方向を南へむけ、「南進」によって米英の帝國主義的權益と正面衝突を來す可能性がここに生じたのである。獨ソ不可侵條約は、こうして、日本對米英の帝國主義戦争の可能性を作り出したものといふことができる。

この條約の成立によって一旦混亂した日本帝國主義を遂に現實に反米英的方向へふみ出させることになった最大の要因は、これを一九三九年秋にひらかれた第二次世界戦争の推移の中に求めることができる。元來日本帝國主義は「東亞新秩序」の建設を標榜して米英の帝國主義に事實上挑戦しながらも、しかも、對米英戦争はこれをでき得る限り回避しようとした。それは脆弱な資本主義を基盤とした日本戦時經濟體制の發展・強化のためには米英に依存せざるを得ないためであり、これは、日本帝國主義がになつた皮肉な矛盾といふことができる。ところが、第二次世界戦争下において、一九四〇年ドイツの春季攻勢によってオランダが席捲され、フランスが潰滅に瀕した状態に陥り、イギリスがドイツによる英本土上陸作戦の重大な脅威にさらされる有様になつたとき、疾風のように展開されたこの局面は、日本帝國主義者に烈しい衝撃を與えた。彼らはこのとき、ドイツの決定的勝利の切迫を

者が木をみて森をみないというようなことがないように、全體をまとめる理論的な視點を出す人が必要になってくるのだが、講座別に分れているような大學の研究體制の中でこのような指導者を求めることは不可能に近い。

共同研究による現状分析をさまたげる大學内の特殊な要因がもう一つある。それは一口に所謂アカデミズムと呼ばれるものかも知れないし、また大學の封建制に關連していることかも知れない。アカデミズムは實踐から切離された知識の累積を作り出し、そしてその累積の高さによって學者の等級がつけられる。従つて累積の量とそれに必要な時間が學問を發展させる唯一の要因と考えられる。それで學問蓄積の低い段階に立っている若い研究者は、まず外國の文獻などを讀んで深遠な理論の習得につとめるべきであるとされ、若い中に實踐的な現状分析などに頭をつっこむのはむしろ有害だと考えられている。若い研究者を現状分析や實態調査から、むしろいたわるような氣持で切離している人が多い。併しこのような學問の評價の仕方が逆に、教授を現状分析や實態調査のおっせん屋にさせ、若い研究者にその下請をさせるといふような共同研究の體制を作り出す場合があるのである。現状分析や實態調査においてやはり力量を發揮するのは若い研究者なのであり、彼等に共同研究のイニシアティブをとらせる必要があるのだが、それには彼等の意識にも生活にもしみこんでいる古いアカデミズムの弊害をとりぞいで行く必要がある。

いろいろな共同研究の困難さをならべたてたが、これは今度の「講座」の企畫をひきうけるまでに見られた事實を率直に書いたのである。併しまたこのような困難と缺陷とをいままで體驗し、

これを克服しようとして來たために、今度のような劃期的な「講座」の一部をも分擔することが出來、またまがりなりにも責任を果して行くことが出來たのだと思うのである。

勞働者のみなさんへ

勞働運動史研究会

「日本資本主義講座」の第七卷に掲載を豫定されている「戦後勞働運動史」は、いま十數人の者が共同執筆にとりかかっております。しかし、私たち執筆者一同は、わずか十數人だけの手で、この仕事やりとげられるとは考えておりません。いろいろな方法で、ひろく勞働者のみなさんの御意見をききながら、いっしょに仕事をすすめることによってのみ、戦後八年間の運動の經驗を正確に記録し、理論化することができると信じています。

そこで、その具體的な方法の一つとして、全國の勞働者のみなさんから、みなさんが自分でじっさいに經驗された運動の日記を送っていただけたら、ひじょうにありがたいと思っております。たとえ、どんなに小さい經驗であっても、また簡単な記録であっても、それが事實にもつくものであるならば、その日記の内容を、私たちが責任をもって「勞働運動史」のなかに生かすつもりであります。そして今後も日記を寄せられたみなさんと密接に連絡をとりながら、研究の面で勞働運動の發展に寄與できれば幸いです。

なお、この日記募集が、全國の工場や事務所、自分たちの職場の經驗を總括するという、たいせつなそれでいてなかなかやり

にくい仕事の手がかりとなり、援助ともなれば、こんなうれしいことはありません。したがって書いて頂く手記も、集團的な討論を経たものがもつとものぞましいと思います。経費の関係で、書いて頂いた手記の送料や稿料を、もれなくさしあげることができないのは残念ですが、趣旨をおくみとりのうえ、ぜひ御協力ください。

手記の内容 一九四五年八月以降の労働運動に關する経験、あ

るいは記録。形式・枚数は自由。住所・氏名は明記していただきたいのですが、發表にさいしては御迷惑をかけないよう配慮します。

締切 二月一〇日。ただし執筆の都合がありますから早ければ早いほど結構です。

送り先 東京都千代田區神田一ツ橋二の三

岩波書店 「日本資本主義講座」編集事務局

讀者のみなさんへお願い

この「講座」は、日本の平和と獨立のために、學問を役立てようと考えている専門家たちの共同研究の成果であります。しかし、この成果も、現在の日本のさまざまな活動分野で、實際上の仕事にあたっておられる讀者の方々からのきびしい批判できたえ直されることよつてのみ、眞に國民のための「研究と運動」の手引になることが出来るものと思われま

す。第一卷、第二卷についての忌憚のない意見や感想、また、今後の計畫についての希望などを、どしどし編集部あてに寄せていた

だきたいと思ひます。

われわれはこうした讀者の方々

第一卷 正誤表

頁行	誤	正
厚文 七七	反封建的な	半封建的な
本文 四二	一般的危機	全般的危機
八五	續いた。	續いた、
二〇	とのべた。	とのべたように、
二二	社會主義の野蠻に反して	フアンズムの野蠻性に反對して
二四	ヴェトナム民主共和國の	ヴェトナムの民族革命の
九〇	タキン・ソウ	タキン・スー
九二	ゲリラ	ゲリラ
九三	IV 日本帝國主義の崩壊	V 日本帝國主義の崩壊
一六	坂本楠彦	阪本楠彦
二〇	福島鑛山監督局が發した右の	福島鑛山監督局が發した
二二	これらの點について	これらの點については
二六	新國會は八月	新國會は一〇月
二七	九月二九日	八月二九日
二八		
二九		
三〇		
三一		
三二		
三三		
三四		
三五		
三六		
三七		
三八		
三九		
四〇		
四一		
四二		
四三		
四四		
四五		
四六		
四七		
四八		
四九		
五〇		
五一		
五二		
五三		
五四		
五五		
五六		
五七		
五八		
五九		
六〇		
六一		
六二		
六三		
六四		
六五		
六六		
六七		
六八		
六九		
七〇		
七一		
七二		
七三		
七四		
七五		
七六		
七七		
七八		
七九		
八〇		
八一		
八二		
八三		
八四		
八五		
八六		
八七		
八八		
八九		
九〇		
九一		
九二		
九三		
九四		
九五		
九六		
九七		
九八		
九九		
一〇〇		

○次回配本 第三卷 統治機構と政治運動 十一月下旬發賣の豫定